

# アフリカ×日本×世界 暴力を平和に変える空間Ⅱ 2011報告書

AFRICA × JAPAN × WORLD:  
Space for Transforming Violence into Peace II  
Final Report, 2011



Space for Transforming Violence into Peace

AFRICA × JAPAN × WORLD



photo credit: Mary Nooter Roberts

本プロジェクトは、コンゴ民主共和国のルバ人の伝統的な記憶装置「lukasa ルカサ」からインスピレーションを得ている。選ばれた秘密結社のメンバーのみが、「ルカサ」を触りながら、地理や歴史、精神性や重要な人間関係を呼び戻し、コード化して読み解いてゆく。我々は同様の方法で、私たちの「神に恵まれた手」を使い、より良いコミュニケーションを育成し、相互理解を深め、対立や摩擦の状態を乗り越える手助けができると信じている。

This project has been inspired by the lukasa, a traditional memory device used by the Luba people of the southern Congo. Learned only by members of a select secret society, it encodes geography, history, spirituality, and important human relationships in a form that can be easily recalled by touch. We believe that by tapping the power of our "gifted hands" in a similar way, we can nurture better communication among people and help them understand each other better and transcend states of conflict and friction.

# アフリカ×日本×世界 暴力を平和に変える空間Ⅱ 2011報告書

AFRICA × JAPAN × WORLD:  
Space for Transforming Violence into Peace Ⅱ  
Final Report, 2011

<http://spacepeace.exblog.jp/>

はじめに／Introduction

本プロジェクトは、2010年度および2011年度の2年間にわたり、アフリカ、日本、世界の多様な層の知的リーダー（研究者・建築家・職人・実務家・アーティスト・ジャーナリスト等）が一堂に会し、ワークショップやシンポジウムを積み重ねることによって、「暴力の空間」を「平和の空間」に変える方途を模索した国際交流事業である。本プロジェクトの主題として掲げる「暴力の空間」とは、アフリカでみられる物理的暴力を伴う紛争だけでなく、日本にも存在する資本や資源をめぐる競合・対立的関係がより激化した空間を含んだものである。本プロジェクトでは、このような「暴力の空間」をどうすれば平和化できるのかについて、日本・アフリカ内外の多様な参加者と共に考え、歴史や文化に学び、多様なアプローチを駆使し、実践に取り組んできた。

本プロジェクトは、この2年間の活動を通じ、知的リーダーが「暴力の空間」に関わる様々な問題を議論し、「暴力の空間」を多角的に捉えなおし、新しい「平和の空間」を創造するために必要な具体的プロセスについて検討することを目指した。そのため、独自に開発したルカサ・ワークショップを用い、立体模型を制作する作業を通して「暴力を平和に変える空間」のイメージを具体的に共有し、新たな「平和の空間」づくりを協働した。以上を通じて、本プロジェクトは、日本やアフリカ、そして世界の人びとが、平和の構築（peace-building）にむけた積極的かつ新たな第一歩を踏み出す試みとした。

This project, which has spanned the years from 2010 to 2011, has brought together many intellectual leaders – researchers, architects, craftspeople, professionals, artists, journalists – and through a series of workshops, symposia, and other activities has investigated the possibility of transforming "spaces of violence" into "spaces of peace." The "spaces of violence" of which we speak are not only those of physical violence as embodied by the armed conflicts which continue to beset the African continent, but also situations which exist in countries like Japan, which are rich in money and resources but where conflicts of other sorts are intensified. In order to address the question of how it might be possible to transform this kind of violence into peace, this project has brought together a diverse group of participants from both Africa and Japan, studied histories and cultures, and utilizing a variety of approaches, has developed a practical framework. Continuing our activities for these two years, the intellectual leaders who have participated have debated the nature of "spaces of violence" and the problems they present, and by reconceptualizing them, have begun to reach conclusions about what sort of concrete process will need to be established in order to visualize new "spaces of peace." We have adapted the unique "Lukasa Workshop," developed by colleagues in the United States, for this purpose. This technique uses physical modeling to allow participants to visualize and share images of "spaces which transform violence into peace," in a very tangible, realistic, and emotionally resonant way. In this way, this project has taken initial steps towards peace-building for the people of Africa, Japan, and the rest of the world.

目次／Contents

はじめに Introduction	1
目次 Contents	2
事業概要 About the Project	3-4
実施概要 About the Activities	5-6
活動詳細・モザンビーク Activities in Mozambique	7-12
活動詳細・ザンビア Activities in Zambia	13-22
活動詳細・東京 Activities in Tokyo	23-28
評価 Evaluation	29-30
広報活動 Publicity	31-34
収支報告 Financial Statement	35



## 事業概要／About the Project

### 2010年度の成果から

2010年度は、日本やアフリカの建築家や研究者、実務家、ジャーナリストらが日本各地を訪問し、「暴力を平和に変える空間」をテーマとしたワークショップを開催した。一連のワークショップを通じて、プロジェクトメンバーは、「暴力空間」を引き起こす社会的な諸要因が、各地における歴史・文化と密接に関連して構築されるプロセスについて学んだ。そして、「暴力の空間」を平和化し、新たな「平和の空間」を創造するためには、「暴力の空間」の問題構造を乗り越えようとする人びとの努力と、彼ら・彼女らの生活に内包される問題解決手段に注目することこそが重要であると認識した。そして、平和構築に関連するテーマを扱う際に取られてきた「議論」「対話」といった手法自体に限界があることを確認し、それら旧来の手法を越えた新しい手法の確立が不可欠であるとの合意に至った。

以上を踏まえ、2010年度の後半には、本プロジェクト独自のワークショップ手法として、「ルカサ・ワークショップ」を立案・試行した。ワークショップ手法としての「ルカサ」は、アメリカの研究者より紹介されたコンゴ民主共和国の伝統的な記憶装置 lukasa（ルカサ）からインスピレーションを得たものである。同ワークショップでは、参加者が二つの対立する集団に分かれ、事前に準備された紛争シナリオに添って、身近な材料（絵具、粘土、紙、紐、植物、石など）を用い、暴力空間（街や地域社会の立体模型空間）を制作するものである。参加者は、暴力空間の形成を、対立する集団のメンバーとしてロールプレイすることにより、実感をもって紛争の根深さを体感する。その上で、暴力空間の平和化を目指し、共に問題解決につながる空間制作を進める手法である。この手法では、口頭での議論・合意形成に終始するのではなく、参加者一人一人が持っている創造力と手を使って、暴力空間を変容・解体し、新たな空間を創造する。本事業では、このルカサ・ワークショップを各地で実施することで、多くの参加者に暴力

### 2011年度概要

2011年度は、プロジェクトメンバーがアフリカを訪問し、地元のNGO、大学や住民らと共に、『アフリカ×日本×世界 暴力を平和に変える空間 II』と題した一連のワークショップを開催した。その過程で本プロジェクトメンバーが特に注力したのは、前年度の成果を踏まえ、(1) 暴力の空間を平和化するために必要な知識や手法について参加者と検討し、2010年度の成果を共有すること、(2) 参加者らとプロジェクトメンバーが共に新たな「平和な空間」のあり方を検討すること、(3) そのための手段として「ルカサ・ワークショップ」をさらに実践的なツールとして発展させること、の三点とした。

アフリカでの訪問先と滞在期間は、モザンビークが7月27日～31日、ザンビアが8月1日～8月14日であった。訪問先では、現地の大学、NGOの協力を得ながら、情報収集、対話、ワークショップを実施した。訪問先は、モザンビーク首都マプト市内、ザンビア首都ルサカと西部の州都モング市一帯および同州内の小都市セナング近郊であった。セナング近郊では、二つの民族集団の村（ロジの人びととブンダの人びとの村）を訪問した。これは、両民族集団間で環境利用に大きな違いがみられるためである。

プロジェクトメンバーは、以上の都市や農村への訪問を通じて、個人や地域社会間の相互扶助を可能とする社会的紐帯の重要性を看取した。また各地の訪問にあたっては、現地の人びとの相互理解を深めるため、自作の紙芝居によって、日本の新旧の生活様式に関するプレゼンテーションをおこない、経済成長を遂げた日本社会のエネルギー問題、資源管理問題、コミュニティの崩壊といった社会的課題を紹介した。以上の試みを通じて得た知見や協働のための良好な関係を踏まえ、両国での日程の後半には、モザンビーク首都マプト及びザン

空間の平和化を試行する具体的プロセスを学ぶ機会を提供してきた。

同ルサカ・ワークショップは本事業で初めて試みられた（初回：横浜ワークショップ）。それ以後、各大学（宇都宮大学、東京外国語大学）や研修（JICA アフリカ仏語圏対象の平和構築や広島平和構築人材育成センターの平和構築基礎セミナー）などで実践が積み重ねられ、そのポテンシャルが確認された。ただし、同ワークショップ手法をより実用的なものとするにはいくつかの課題が残った。例としては、ターゲットとする日本、アフリカ、世界の紛争の実態に即したシナリオの作成、ファシリテーション手法などである。そこで2011年度には、同手法の開発に実践的に取り組むこととした。

そして2011年3月11日、日本を襲った東日本大震災によって、多くの人びとの命や生活が奪われた。福島第一原発事故の影響もあり、全国的に人びとの日常生活へ混乱と不安がもたらされる事態となった。同震災後、プロジェクトメンバーは、それぞれのネットワークを活かし、東北内外での被災者・避難者支援活動に携わったが、未曾有の被害を被った日本が「暴力の空間」の状態にあることを実感し、本プロジェクトの社会的意義を再認識するに至った。

以上を受けて、本事業の2年目に予定していたアフリカ各地への訪問では、自然災害や環境管理を主題に掲げ、地域社会で育まれてきたコミュニティの機能や固有の知識を学び、「暴力の空間」を平和化させる方途を学ぶこととした。そのため、事業1年目に実践してきたルカサ・ワークショップの手法を活かし、日本のプロジェクトメンバーがアフリカ各地を訪問し、自然災害や環境管理に関するワークショップを開催することを計画した。また、帰国後、日本でのワークショップを開催することで、アフリカでの学びを日本の知的リーダーと共有し、震災後の日本における、「暴力の空間」の問題構造や、それ乗り越えた「平和の空間」を構築する方途を共に探ることとした。

ピア西部州の州都モングでルカサ・ワークショップが試みられ、現地参加者の好評を得た。

以上のアフリカ訪問を経て、プロジェクトメンバーは、ルサカ・ワークショップの根幹に位置づけられる手を使った空間創作の手法の有効性が、日本を越え、アフリカ、ひいては世界的な意義を持ちうる点を確認した。特に、プロジェクトメンバーと参加者とが、交流や協働を通じて相互理解を育むことによって、活発な意見交換がなされ、結果として共有された情報・知識が活かされた、オリジナリティあふれる「超越」手段（問題解決を越えた新しい展望）が導き出されることが明らかになった。また、アフリカでの同ワークショップでの経験が、同手法の改善に沢山の気づきをもたらした。ワークショップ終了後、現地の参加者からは、今後の継続的な協力について提案がなされるなど、ルカサ・ワークショップがアフリカでの新たな関係構築に基づく「平和の空間」の創造・発展に有用であることも確認された。

アフリカから帰国後は、アフリカでの成果報告を兼ね、2年間の本プロジェクト成果を日本へ還元することを目的としたワークショップを東京で開催した。同ワークショップには、一般市民の他、2010年度の本プロジェクトの参加者、アフリカ関係者に加え、東北の被災地や原発事故の影響を受ける福島や栃木の在住者が参加し、ルカサ・ワークショップを実践しつつ、現在日本に出現している「暴力の空間」をどう平和化するかについて活発な議論を繰り広げた。そして、この成果は、日本に留まらず、紛争や環境破壊、災害に直面するアフリカ、あるいは個人・地域社会レベルの課題を抱える世界のどの地域の人びとにとっても、有効性を持ちうるとの結論に至った。

### Activities of 2010:

In 2010, Japanese and African architects and researchers, practitioners, journalists and others, conducted site visits in Japan and held workshops on the theme of "Spaces to transform violence into peace." During these initial workshops, project members investigated the root causes of "spaces of violence," and the social, economic, historical, and cultural structures by which they become entrenched. Through this, the importance of recognizing the effort required to overcome these structures and create spaces of peace was highlighted, as well as how essential it is for people who wish to do so to closely examine the internal characteristics and aspects of their own lifestyles. Further, it became clear that the conventional methods of debate and discussion are wholly inadequate for addressing these issues deeply and effectively, and that new processes would have to be developed and nurtured. With these points in mind, inspired by the traditional "lukasa" memory devices of the Luba people of the Democratic Republic of the Congo, we developed a special "Lukasa Workshop" method. In these workshops, participants are divided into two opposing groups, and following a prepared conflict scenario, they model a "space of violence" in physical form which depicts the relationships in an urban, rural, or regional setting, using common materials such as clay, paper, string, twigs and leaves, stones, and similar items. By playing the roles of different actors within this "space of violence," they experience the intractability of conflict over time and arrive at a clear overview of the constituent factors. Once this is established, the participants begin to experiment with changing the physical environment in ways that might help transform the spaces of violence to ones of peace. Relying on their creativity and their hands instead of verbal discussion exclusively, and by imagining and making alternative spaces and relationships, each person is able to learn the process of implementing positive transformation directly. After

### Activities of 2011:

During the 2011 portion of the project, team members conducted site visits in Africa, and held a series of workshops entitled "Africa x Japan: Spaces for Transforming Violence into Peace II," along with local NGOs, universities, and citizens. Based on the results of the previous year, the team focussed its activities on these three main goals:

1. To discuss with local participants what kind of knowledge is necessary for fostering the type of peaceful transformation we envision, and to share with them our findings and results from 2010.
2. To consider together new ways of achieving "spaces of peace."
3. To develop the Lukasa Workshop method into a more applicable tool for helping implement this kind of process.

Japanese team members to visited Mozambique from July 2-31, 2011, and Zambia from July 31 to August 14, 2011, conducting research, continuing our dialogue with last year's participants, giving presentations and holding workshops and meetings with the cooperation of local counterparts. The sites visited included the city of Maputo, capital of Mozambique, and the city of Mongu and the villages of Lyani and Linyuku in the Western Province of Zambia. The latter two villages, part of the Senanga district, are home to members of the Lozi and Mbunda tribes respectively, and provided an opportunity to observe very different approaches to environmental management. In these towns and rural locations, team members were able to observe the importance of social and economic ties for enabling and promoting mutual assistance. In order to increase mutual understanding, the team used traditional Japanese storyboards (kami-shibai) to describe the past and present lifestyles of Japanese people, and to illustrate the social issues which have confronted the country since undergoing economic growth, such as energy problems, environmental

having success with our first attempt at this kind of workshop in Yokohama, in November of 2010, our project members have continued to refine the techniques by holding workshops at universities (Utsunomiya Univ., Tokyo Univ of Foreign Studies, United Nations Univ.) and with training groups at JICA (Francophone Africa Peacebuilding Study), and have confirmed the potential of this method.

However, several unresolved issues remained before the Lukasa Workshop method could be applied in an actual conflict situation. These include the development of effective scenarios to use in target areas in Africa, Japan, and the rest of the world, and the development of effective training methods for facilitators, to name a few. For this reason, it was decided to proceed with developing practical applications of the workshop method in 2011.

Many people lost their lives and their livelihoods in the Great Eastern Japan Earthquake of March 11, 2011. Added to the effects of the accident at the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant, the lives of many were thrown into a state of disruption and insecurity. Responding to these disasters by developing action networks and assisting with relief efforts for victims and evacuees in Tohoku and elsewhere, project members were confronted with the reality of post-disaster Japan as an extreme example of a "space of violence," and rediscovered the immediate social significance of the project.

Influenced by this development, it was decided to focus the project activities in the second year on using site visits in Africa to learn from communities that have suffered from natural disasters or are confronted with challenging environmental problems and have responded with carefully nurtured resilience and wisdom. Consequently, project members planned their site visits in Africa in 2011 with a focus on holding workshops dealing with natural disasters and environmental management.

problems, and the fragmentation of communities. Based on the good relations gained through these efforts to improve our knowledge and the level of collaboration, the team was able to conduct Lukasa Workshops in both countries (in Maputo, Mozambique, and Mongu, Zambia), and thereby developed a degree of mutual trust with the local communities.

These visits confirmed the effectiveness of using creative hand-based techniques such as these, and the possible significance of this for Japan, Africa, and the global community. In particular, by fostering mutual understanding through cooperation and a lively exchange of views, both team members and local participants arrived at a creative and original method of sharing information and knowledge which "transcends" conventional conflict resolution. In addition, many ways of improving the Lukasa Workshops were suggested by the experience of organizing them in Africa. At the end of the workshops, many local participants expressed a strong desire to establish deeper cooperation, and agreed that the Lukasa Workshop method had the potential to enable a new kind of vision of "spaces of peace" for Africa.

Upon the return of the project team to Japan, an additional workshop was held so that we could report our results in Africa and share our findings from the past two years. Again, using the Lukasa Workshop format, regular citizens, project participants from 2010, Africans resident in Japan, and people affected by the tsunami in Tohoku and the nuclear disaster in Fukushima engaged in lively, open discussion about how we might transform "spaces of violence" in Japan into "spaces of peace." Among the conclusions reached was that this workshop method would be effective for resolving many kinds of social issues, not just in Japan and areas of Africa affected by armed conflict and environmental damage, but for situations of violence anywhere, down to the level of individuals and local communities.



主催 助成 後援 協力機関

Organizers, grants, sponsors, partner organizations

『アフリカ×日本×世界 暴力を平和に変える空間 II』

主催：金沢工業大学 未来デザイン研究所  
企画：アフリカ×日本×世界 暴力を平和に変える空間 II 実行委員会  
助成：独立行政法人 国際交流基金 金沢工業大学  
協力：ジョゼ・フォルジャズ建築事務所  
エドワード・モンドラーネ大学、モザンビーク  
パロツェランド・コム、ザンビア西部の NGO  
YWCA モング支部、ザンビア西部  
わわプロジェクト (3331 Arts Chiyoda)  
BankART 1929

プロジェクトメンバー：

- ・アズビー・ブラウン 金沢工業大学未来デザイン研究所所長／建築家
- ・竹下都 金沢工業大学未来デザイン研究所研究員／キュレーター
- ・船田クラークセンさやか 東京外国語大学大学院准教授／アフリカ研究、国際関係学、平和・紛争研究
- ・米川正子 宇都宮大学特任准教授／独立行政法人国際協力事業団・平和構築専門家、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) コンゴ民主共和国・ゴマ元所長
- ・村尾るみこ 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究機関研究員／アフリカ研究、ザンビア西部農村・地域研究者
- ・ローレンス・フリント 現地 NGO・ZVDI 代表、国際 NGO・ENDA-TM コーディネーター、コペンハーゲン大学アフリカ研究センター所属（今回の訪問には同行しなかったが、本プロジェクトの準備段階より、アドバイザー・コーディネーターとして参加）

Africa x Japan x World : Space for transforming violence into peace II

Organized by: Kanazawa Institute of Technology Future Design Institute  
Planned by: Executive Committee of "AFRICA x JAPAN x WORLD: Space for Transforming Violence into Peace II" 2011- 2012  
Supported by: The Japan Foundation  
Cooperation: Jose Forjaz ARCHITECTS, Maputo, Mozambique  
The Eduardo Mondlane University, Maputo, Mozambique  
Zambezi Valley Development Initiative (ZVDI), Mongu, Zambia  
YWCA, Mongu, Zambia  
WAWA Project (3331 Arts Chiyoda), Tokyo  
BankART 1929, Yokohama

Project members:

Our Japan-based team members who participated in the project in Africa this year include:

- Azby Brown (USA): Director of the Future Design Institute of the Kanazawa Institute of Technology.
- Miyako Takeshita: Curator at the Future Design Institute of the Kanazawa Institute of Technology.
- Dr. Masako Yonekawa: Special Associate Professor, Utsunomia University.
- Dr. Rumiko Murao: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa,Tokyo University of Foreign Studies.
- Dr. Sayaka Funada-Classen: Associate Professor, Graduate School,Tokyo University of Foreign Studies.

In addition, Dr. Lawrence Flint (Climate Change Adaptation and Knowledge Management Advisor, UNECA and UNDP Africa Adaptation Programme; Co-founder and Executive Director of Barotseland.com) was closely involved in planning and coordination, but did not participate directly.



実施日程・場所／Schedule and locations

2011年 7 月27日(水)～7月31日(日) モザンビーク：マプト  
2011年 7 月31日(日)～8月14日(日) ザンビア：ルサカ、モング、セナンガ  
2011年11月20日(日) 東京

Thursday., July 27 - Sunday., July 31, 2011: Mozambique: Maputo  
Sunday., July 31 - Friday., August 14, 2011: Zambia: Lusaka, Mongu, Senanga  
Sunday., November 20, 2011: Tokyo



Countries visited in 2011

モザンビーク 2011年7月27日(水)～31日(日)

(参加プロジェクトメンバー：アズビー・ブラウン、竹下都、船田クラークンさやか)

アフリカ南東部に位置するモザンビークは、30年にも及ぶ植民地解放戦争及び武力紛争の後、発展を続けてきた国である。メンバーは、2010年度ワークショップに招聘したジョゼ・フォルジャズ（建築家、首都マプト在住）と共に、「暴力の空間」を「平和に空間」へ変える議論を発展させることを目的として、首都マプトの訪問を行い、ルカサ・ワークショップを実施した。まず、フォルジャズ氏の建築作品や地元コミュニティなどを訪問した。プロジェクトメンバーは、コミュニティ内の生活環境、社会関係の維持に関する実態に問題関心をもった。

マプト市内にあるエドワード・モンドラーネ大学建築学部（the Faculdade da Arquitectura e Planeamento Físico (FAPF) at Eduardo Mondlane University, <http://www.architecture.uem.mz/>）では、日本の文化・社会、現代的な社会問題や東日本大震災に関するレクチャーを実施した。学生からは多くの質問が出され、活発なやり取りがなされた。そこでプロジェクトメンバーは、地元コミュニティの訪問や大学のレクチャーを通じて出された問題関心を「ルカサ・ワークショップ」のシナリオに反映させ、ワークショップを開催することとした。



ワークショップのシナリオでは、地球温暖化による海面上昇に対する都市計画と、それによって浮上する新たな課題が取り上げられた。ワークショップでは、都市計画などを学ぶ建築学専攻の四年生が三つのグループに分かれ、それぞれのグループごとに、スラムの生活環境問題のさらなる悪化を議論し、新たな街と住宅の再建、それによる再開発に対抗する新旧住人や企業などの対立等についての問題解決を図る議論を重ねた。そして「暴力の空間」から「平和の空間」への移行プロセスに必要なアクション等について討議し、コミュニティにおける「平和の空間」のあり方を模索するプロセスについて発表がおこなわれた。

同ワークショップは、建築学部には所属する教員・学生という集団であったため、クオリティの高い議論や作業が展開された。それ故に、ファシリテーションにおいては、参加者から既成概念（高いクオリティの「作品」造り）を捨てた新たな発想を引き出す工夫が課題として残った。これについては次の訪問地ザンビアでさらなる改善を図ることとした。

MOZAMBIQUE, July., 27-31, 2011

(participating members: Azby Brown, Miyako Takeshita, Sayaka Funada-Classen)

Overview:

Mozambique, located in the southeastern portion of Africa, experienced over 30 years of war, both for independence and internal conflict, followed by years of development. Team members visited the capital city of Maputo to conduct field research, give talks, and hold a workshop at the Faculdade da Arquitectura e Planeamento Físico (FAPF) at Eduardo Mondlane University <<http://www.architecture.uem.mz/>> with the collaboration of noted Mozambican architect Jose Forjaz, who had participated in the "Africa x Japan x World" project in Japan in 2010.

The purposes of our work in Maputo were: to continue the dialogue begun with Prof Forjaz last year; to observe his work in context and examine it more closely; to investigate the problems and conflicts inherent in the city of Maputo, particularly for residents of the large "informal" city (shantytowns); to present relevant aspects of Japanese culture, particularly regarding resilience or the lack of it in the face of natural and manmade environmental disasters such as the Great East Japan Earthquake and Tsunami of March 11, 2011; to further refine the Lukasa Workshop technique by focusing on the particular contributions that could be made by trained designers and planners; to collect and develop new workshop scenarios based on the actual conditions and issues faced by this local African community. On the basis of these areas of preparation, after a series of preparatory lectures, a Lukasa Workshop was held with students and faculty at FAPF.

Scenarios dealing with the effects of a rise in ocean level due to global climate change were devised, concentrating on the issues of population movement and urban planning that will arise in such a situation. The sixteen workshop participants, fourth-year architecture students, were divided into three groups, and each group divided into opposing teams representing conflicting constituencies, and discussed the problems faced by residents of the informal city, ideas for new dwellings and towns, and possibilities for the opposing sides in the scenarios to work together to the benefit of all. The kinds of actions that would be required to transform these kinds of "spaces of violence" into "spaces of peace" were considered, and the teams described their processes for creating "spaces of peace" in the communities under discussion.

The participants in Maputo were all either design students or faculty. They were already familiar with the design process, with the language of presentation, and had been encouraged to think deeply about urban conditions for years. In this sense, they brought useful and developed tools to the workshop, but one of the challenges we as facilitators faced was to help them step out of their habits, to take creative risks, to think even more freely than they were accustomed. This challenge became one of the points to be addressed in the subsequent visit to Zambia.

7月27日(水)

首都マプト到着。マプトでのスケジュール確認。

7月28日(木)

HIV のホスピス兼孤児院である「歓びの家」を訪問。エドワード・モンドラーネ大学建築学部にて、学生80名を対象にアズビー・ブラウンが日本建築・デザインに関して講演を行う。

Wed., July 27:

Team arrived in Maputo. Planning meeting to finalize schedule in Maputo.

Thurs., July 28:

Sites visits, including the "Casa da Alegria" ("House of Joy") and AIDS hospice and orphanage. First talk by Azby Brown, "Japanese Traditional Architecture and Environmental Design: Inheriting the spirit of resilient beauty," presented at FAPF, and attended by approximately 80 students and faculty.



③ジョゼ・フォルジャズの設計による「歓びの家」のチャペル。  
Chapel at the "Casa da Alegria" ("House of Joy") an orphanage and aids hospice designed by Jose Forjaz in Maputo.  
④「歓びの家」の中庭で遊ぶ子供たち。  
Playtime in the courtyard of the orphanage.  
⑤エドワード・モンドラーネ大学建築学部にて講演。その後熱い議論を戦わした。  
Several well-attended talks were given to architecture students and faculty at FAPF, followed by lively discussions.



7月29日(金)

エドワード・モンドラーネ大学、マプト市内視察。同大学建築学部にて、アズビー・ブラウンと竹下都が日本の建築計画と現代美術について講演。

Fri., July 29:

Site visits, including the Instituto Superior de Relações Internacionais (Higher Education Institute for International Relations). Talk by Miyako Takeshita, "Contemporary Japanese Art as an Index of Diverse Minds," and second talk by Azby Brown, "Contemporary Japanese Architecture and Planning: Brilliant dreams undone by reality," presented at FAPF.



① ジョゼ・フォルジャズの設計による大学。 Instituto Superior de Relações Internacionais (Higher Education Institute for International Relations), designed by Jose Forjaz.  
② マプトの非合法居住区。 Street through the informal settlements of Maputo  
③ エドワード・モンドラーネ大学でのワークショップ参加者。 Group photo of the workshop participants at FAPF.

7月30日(土)

終日、エドワード・モンドラーネ大学建築学部にてルカサ・ワークショップを実施。

Sat., July 30:

All day: Lukasa workshop with 4th year architecture students and faculty members at FAPF.

### モザンビークでのルカサ・ワークショップのシナリオと参加者の感想

モザンビークに関連する研究報告と、現地訪問で得たマプト市の情報を総合してシナリオとした。シナリオの内容は、海面が五メートル上昇することにより、首都マプトの中でも沿岸部に位置する商業地及び何千もの住宅地に浸水が生じ、それによって、保健衛生、インフラ、経済等の悪化、および社会不安の広がり等が発生した、というシナリオを作成した。同シナリオでは、住民も企業も大規模な移動を強いられるが、現行の地理的条件により近隣地域への移転は不可能で、遠方地に新たなコミュニティを形成することを余儀なくされると仮定し、時代を2030年に設定した。

#### シナリオ 1：「Central Business District Inundation」

都市で政府に支援を受ける企業とスラムの住民が土地をめぐり対立している。企業側の5000世帯のビジネス展開のため、スラムの住民1万世帯が立ち退きをさせられようとしている。スラムの住民が4倍もの人口密度で生活することを可能とし、企業側の人びとと理想的に共生する空間を立体模型として作成する。

#### シナリオ 2：「Costa del Sol Inundation」

都市沿岸部に合法・非合法双方の居住区がある。ここを立ち去らなければならなくなったが、非合法居住区の住民1万世帯が移転を反対している。住民が4倍もの人口密度で生活することを可能とし、都市住民が理想的に共生する空間を立体模型として作成する。

#### 感想

1. 初めにシナリオや割り当てを聞いたとき、私は数週間かかりそうだと思い、一日でワークショップを終えることができないと思った。でも実際は数時間で、議論を発展させることができた。
2. こういう問題は、実際起こりうる問題であり、私たちにとって考えるべき問題だと思う。でも、今まで私たちはこのような事態について考えるように言われたことはない。
3. 問題の提示され方が工夫されていたので、ワークショップを通じてとても多くのことを成し得たと思う。またこうした素晴らしい先生がいればいいと思った。

### LUKASA WORKSHOP IN MAPUTO:

Recent studies on the effect of global warming and sea-level rise on African coastlines have shown that Mozambique, and the Maputo region in particular, may suffer a great loss of land area in heavily populated zones. In particular, a worst-case scenario was selected in which the ocean level rises five meters, inundating large portions of Maputo. In this scenario, much of the central business district (CBD) of Maputo will be inundated, including rail and port infrastructure, and adjoining residential neighborhoods. The city will probably lose a large portion of the ocean coast as well. These losses will be compounded by an increased vulnerability to cyclone-induced flooding farther inland. The consequences of this loss of city areas will be great in terms of costs to economic activity, transportation, health, and social stability. Populations and businesses will need to be relocated on a large scale, and because of existing occupancy and patterns of land use, any attempt to do so will put different communities and constituencies into conflict. These scenarios were set in the year 2030.

#### Scenario 1: "Central Business District Inundation"

Business interests, backed by government, who must find a new large-scale location are pitted against residents of the informal city. Approximately 5000 families will need to be moved along with 3000 businesses, and approximately 10,000 residents of the informal city stand to be exploited and displaced. It is possible to increase the residential density of the informal city to four times the present. The task is to use the Lukasa Workshop technique to allow an ideal space of coexistence and peace to emerge which business interests and the rest of the population can share.

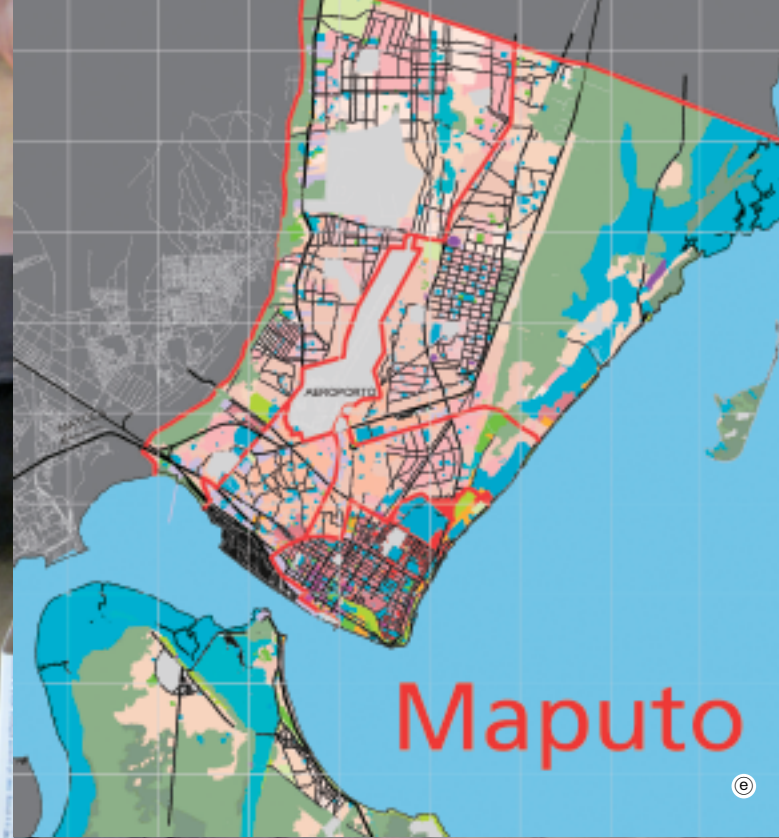
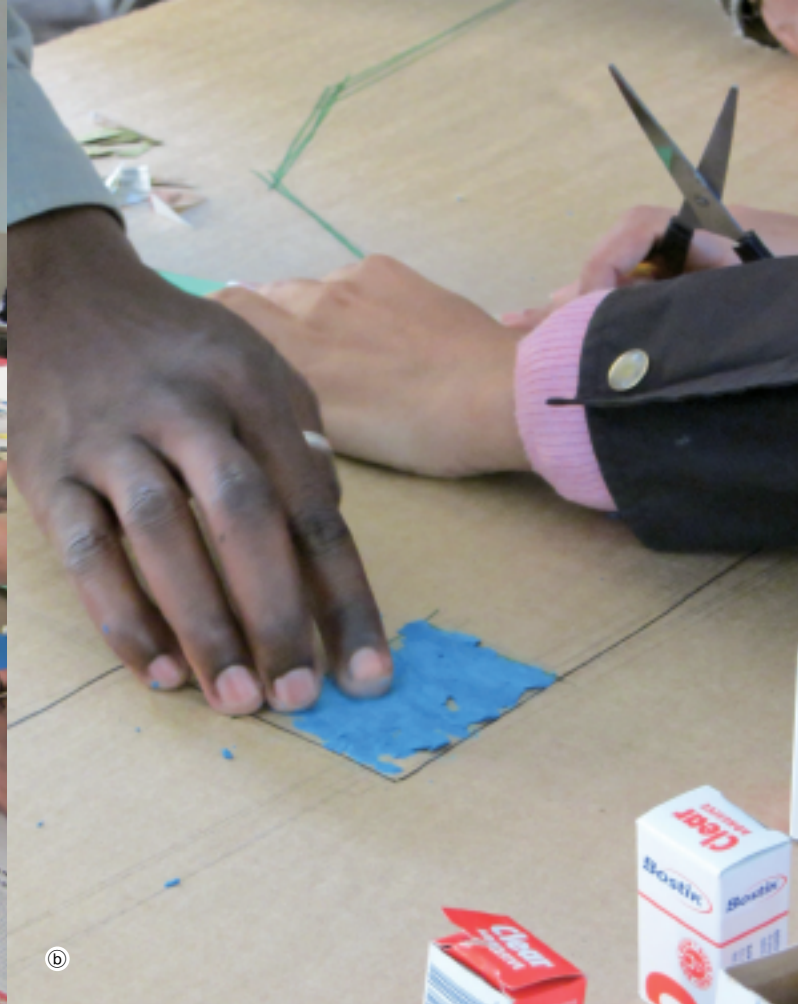
#### Scenario 2: "Costa del Sol Inundation"

Residents of the coastal zone, about 10,000 families in both formal and informal areas, must move, and are opposed by about 10,000 families who live in the informal city who stand to be displaced. It is possible to increase the residential density of the informal city to four times the present; the task is to use the Lukasa Workshop technique to allow an ideal space of coexistence and peace to emerge all of the affected communities can share.

#### Comments from student participants:

1. "When I first heard the assignment, I thought it would be impossible to complete it seriously in only one day. But in fact in only a few hours we were able to develop proposals that would usually take us weeks."
2. "These are the kinds of problems we should be thinking about, because this is what we will actually be confronted with in the future. But until now we haven't been asked to do this."
3. "I think we were able to accomplish so much because of the way the problems were presented. I wish we always had such excellent tutors."





①②③④

エドワード・モンドラーネ大学でのルカサ・ワークショップの風景。学生たちは限られた材料とテクニックを駆使し模型を制作して行く。

Views of the Lukasa Workshop in Maputo. Students were encouraged to use unconventional materials and techniques for their models, and to focus on teamwork. The atmosphere was both lively and disciplined.

⑤マプトの地図

Map of the city of Maputo.

⑥⑦⑧

学生達の、マプトの街の為の立体模型によるプロポーザル (⑥) と、その一カ所に焦点をあてたプロポーザル (⑦⑧)。

Student projects included proposals for both the city as a whole (⑥) and specific communities within it (⑦⑧).



## 活動詳細・ザンビア／Activities in Zambia

ザンビア 7月31日(日)～8月14日(日)

(参加プロジェクトメンバー：アズビー・ブラウン、竹下都、米川正子、村尾るみこ)

モザンビークに西接するザンビアでは、首都ルサカから西600kmに位置する西部州を訪問した。西部州はザンビアの中でも最も開発が遅れた、貧しい地域の一つである。一方で、西部州に広がるザンベジ川上流のパロツツエランド氾濫原は、かつてロジ王国が建国された場所であり、ロジの人びとの伝統的な政治社会体制や生活様式など、独自の豊かな文化が残っている。プロジェクトメンバーは、まず西部州の州都モング近郊を視察した。視察では、氾濫原の毎年の洪水とともに生きる人びとの村での生活や、西部州一帯で課題となっている環境利用の問題に強い関心を抱いた。

その後、プロジェクトメンバーは、州都・モングのYWCAに協力を仰ぎ、YWCAモングの別館センターにてルカサ・ワークショップを開催した。参加者はYWCAモング支部の活動に参加するスタッフと、そのメンバーの若者を含む12名で、二つのグループに分かれて議論した。プロジェクトメンバーは、ファシリテーターとして参加した。ここでのワークショップでは、まず本プロジェクトのテーマ「暴力の空間の平和化」について説明した。また日本から持参した自作の紙芝居を使ったプレゼンテーションを行った。日本の伝統文化に加え、高度成長後の日本社会が抱える課題が共有された結果、日本の歩みから学ぶことの重要性が確認された。その他にも、現地の参加者からは、ザンビア西部に暮らす人々の自然との共存のあり方などが紹介され、実り多きやり取りとなった。

以上を踏まえ、モングで実施したルカサ・ワークショップのシナリオは、開発と環境利用の両立をテーマとした。参加者は、自然災害への対処や、持続可能な自然資源管理について、有意義な議論を交わした。また、参加者からは、ワークショップ全体への高い評価を得た。そして、現地の人びとからは、本ワークショップ手法を今後も実践したいとの希望が表明され、共に今後の協力体制を検討することができた。

その後、モングから南100kmにあるセナंगाへ移動し、セナंगा近郊の二村を視察した。二村での議論やワークショップでは、村で日常的に生じている問題の克服に焦点が当てられた。この訪問から、プロジェクトメンバーは、現在の同地域にみられる自然環境や政治経済的状況が抱えるチャレンジを認識しつつも、このように厳しい状況だからこそ、コミュニティにおける社会経済的紐帯を維持していくことが重要である、と実感をもって学ぶことができた。

また、ルカサ・ワークショップについても、シナリオ作成やファシリテーションのプロセスに、日本の情報や、現地で実際に起っている問題に関する情報等をより具体的に取り込むことで、より実質的で実践的な議論が可能となることが見出された。

### ZAMBIA, July 31 - August 15, 2011

(participating members: Azby Brown, Miyako Takeshita, Masako Yonekawa, Rumiko Murao)

#### Overview:

Team members visited Zambia for approximately two weeks between July 31 and August 15, concentrating on the Western Province, which lies 600km from the capital, Lusaka, and is the least developed region of the country. The purpose of our visit was to conduct field research and hold talks and workshops in the Western Province, as well as to continue our dialogue with last year's invited participant, the builder Mubita Mubita, and see his work in context. As in Maputo, the team hoped to investigate the problems and conflicts inherent in the Zambian capital city of Lusaka and in the isolated and underdeveloped Western Province, which remains a semi-autonomous kingdom whose governance is shared between the Zambian national government and the Barotse Royal Establishment (BRE). (For more on the history and culture of this area see <http://www.barotseland.com/history1.htm> )

Conducting research or organizing activities in the Lozi Kingdom involves becoming familiar with the local culture and customs, paying a number of courtesy visits to various officials, and being conscious of the community's wariness of outsiders, which is nevertheless accompanied by great enthusiasm and warmth. Our team was extremely fortunate to have the assistance of local NPO counterparts, who acted as coordinators, guides in the Western Province, and translators, and who also guided us through many situations involving unfamiliar culture, customs, and manners.

The team held a workshop with members of the YWCA in Mongu, and talks at two villages in the Senanga region, the sites of a lengthy research program conducted by team member Dr. Rumiko Murao. The purpose of the workshop and the talks were to further refine the Lukasa Workshop technique, again by collecting and developing new workshop scenarios based on the actual conditions and issues faced by these communities; and to present relevant aspects of Japanese culture, particularly regarding resilience or the lack of it in the face of natural and manmade environmental disasters. We were able to do this, and, in addition, the team laid the foundation for continuing cooperation in both Mongu and the Senanga area. Beyond this, the team determined that the lessons we learned there have direct potential applications at home in Japan and elsewhere.

Team members participated in the workshops as facilitators, explaining the theme of "transforming spaces of violence into peace" and sharing issues that have confronted Japanese society following its high rate of economic growth. In addition, we provided many examples to illustrate the importance for countries like Japan to learn from their past lifestyles. Local participants in turn provided



good descriptions of how the people in the Western Province have coped with environmental problems. The scenario developed for this particular workshop concentrated on the management of economic development and the environment, and it led to a lively discussion about managing natural disasters and ways to sustainably use natural resources. The workshop was highly praised by the participants, who expressed their wish to share the Lusaka Workshop method, opening the way for continuing cooperation. The two villages we visited next are located in the Senanga area, about 100km south of Mongu. In our discussions there we focused on issues that confront the people there in their daily lives. The role that social and economic networks play in increasing the ability of communities in hardship areas to cope became extremely clear, while the challenges that such extreme environmental and socio-economic situations bring were highlighted. We were able to compare and contrast the situations in Japan and Senanga, and a very substantial discussion emerged, the key elements of which could later be incorporated into the Lukasa Workshops.

#### 7月31日(日)～8月2日(火) ルサカ市 (首都)

打ち合わせおよび西部州訪問準備、2010年度に日本でのワークショップ / シンポジウムに招聘したムビータ・ムビータによる現地建築物とルサカ市視察。同氏からは都市計画の解説も受けた。

#### Sunday., July 31 - Tuesday., August 2 (Lusaka):

Meetings and preparations for visit to Western Province; site visits to architecture projects by 2010 invited guest Mubita Mubita; discussion of relevant aspects of architecture and urban planning in Lusaka.



ムビータ・ムビータの設計によるセブンスデー・アドベンティスト教会。  
A Seventh-Day Adventist Church being built by Mubita Mubita in Lusaka.



住宅設計の際に考慮すべき、伝統的な文化と家族関係について説明をするムビータ・ムビータ。  
Mubita Mubita explains aspects of traditional culture and family relations which must be considered when designing new houses.



8月3日(水)～8月9日(火) モング市（西部州州都）

現地コーディネーター Barotseland.com、YWCA や王国議會を訪問。ザンベジ川の氾濫の為に、雨季、台地上の王宮へ移動していた王が、氾濫原の王宮へ戻る儀礼クフルヘラを視察。モング市内 YWCA 別館センターにてルカサ・ワークショップ開催。

Wednesday., August 3 - Tuesday., August 9 (Mongu, Western Province):

Meetings with local coordinator Barotseland.com, YWCA, and parliament of the Lozi Kingdom. Study tour of the Zambezi flood plain, and viewing Kufuluhela ceremony. Held Lukasa workshop with YWCA members in Mongu.



① ロジの人々の肥沃な大地であるザンベジ川のバロツェランド氾濫原。何世紀にもわたり、乾期にはここで農業や牛の放牧をする。

The Zambezi floodplain as seen from Mongu. This plain, called "Bulozi," is considered the ancestral homeland of the Lozi people, and has been used for farming and cattle grazing for centuries.

② 現地コーディネーター、バロツェランド・コム（ザンビア西部の NGO）の事務所を訪問。

Our team visits our local counterpart in Mongu, Barotseland.com.

③ 「クフルヘラ（水に帰るの意味）」と呼ばれる伝統儀式。60 人もの伝統的な衣装をまとった漕ぎ手が毎年雨季に台地上の王宮へ移動していた王を、氾濫原の王宮へ運ぶ。 The Kufuluhela ceremony ("getting back into the water") is a key cultural expression of Lozi identity, and is held annually.

## モングでのワークショップのシナリオと参加者の感想 8月9日(火)

### シナリオ

モング周辺での視察を通じてえた情報をもとに、舞台をモングに似た場所に設定した。アフリカの大河沿いにある地方都市では、近年温暖化による気候変動のため、干ばつや大洪水などの災害が問題となっている。一方で、木炭作りによる森林伐採が進み、都市近郊にある森の砂漠化と環境破壊が深刻な問題となっている。参加者は、森林伐採による環境破壊に苦しむ現地住人と、其の周辺の住人との二手に別れて、お互いに持続可能で平等な森林や河川周辺の環境利用について現在抱える問題を議論し、「平和な空間」としての地方都市のあり方を立体模型の空間として提示する。

以上に付随して、次の7点の課題が提示された。

① 政府の国有林を含む森に対する規制や監視の弱さ ② 無秩序な森林伐採 ③ 首都ルサカや他国への木炭の大量輸送 ④ 村への電力供給がなされないこと ⑤ 村の厳しい生活状況による若者の都市への流出 ⑥ 都市での無職業の若者による犯罪や売春 ⑦ 売春による HIV 患者とシングルマザーの増加。

### 感想

1. 手を使い議論を発展させる手法は、まさに“gifted hand（神様に恵まれた手）”を使おうという趣旨であり、共感する。
2. ほかの町や村でもこのワークショップをやりたい。
3. 震災後の日本の現状は胸が痛い。ザンビアのコミュニティや家族の強い紐帯は日本の人びとに伝えるに値すると思う。
4. 人びとは、森林伐採など自分たちがやっていることの影響を知るべきだ。しかし、格差や不平等がなくなると、彼らはやめることができない。これをどう解決するかを共に考えるべきである。

## LUKASA WORKSHOP IN MONGU, Tuesday., August 9

With local issues our team had learned about in the Western Province in mind, we developed a scenario and maps based on the problem of deforestation. On one side were villagers suffering from the environmental damage caused by deforestation, due to cutting trees to make charcoal, on the other were city dwellers who lack other viable sources of fuel. The forest lies between them. The maps included rivers, roads, and other essential details, and while the location was not set as Mongu itself, it replicated relationships and dynamics found there. The task was for both sides to come to agreement about sustainable and fair use of forest resources, and develop better solidarity and a sense of shared destiny in the face of environmental change, using the Lukasa Workshop techniques of modeling by hand.

### Other factors in the scenario included:

- Poor governmental regulation and monitoring of forests, including national forests.
- Unregulated cutting of timber for other uses.
- Export of large amounts of charcoal to Lusaka and other parts of the country.
- Most villages are not served by electrical power.
- Difficult living conditions in the villages cause young people to move to the city to look for work.
- Lack of work in the cities leads young people to turn to substance abuse, prostitution, and crime.
- Increase in prostitution leads to a rise in HIV-AIDS, early death, and an increase in widows and single-mother families.

There were two tables, each with six participants, all YWCA members and staff, divided into teams of three. Each table quickly developed a distinct identity and "style," and a very lively dynamic of discussion and work. It soon became clear that the members of this group have been thinking about this problem for a long time, and that the workshop gave them a positive and creative way to express their thoughts and feelings. The debate about the merits of possible solutions became very animated at times. Our team members were very impressed with the depth and sincerity of the participants, who immediately saw that it is important for them to raise awareness in the surrounding communities about this problem.

### Comments from participants:

1. It's wonderful and appropriate to use our "gifted hands" to discuss problems like this.
2. We want to hold similar workshops in villages in the region that we work with.
3. Seeing the situation in Japan after the earthquake makes my heart hurt. I hope that people in Japan can benefit from seeing the strength of our families and communities.
4. People here should know about the bad effects of what they're doing to the forests, but without alternatives they'll never be able to stop.





①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨

p17

- ① ルカサ・ワークショップはモングのYWCAの施設で開催された。ここはHIVや家族問題、薬物乱用などの相談を受けるスタッフが常駐している。The YWCA Drop-in-center in Mongu is staffed for counseling and stocked with literature on HIV, family problems, substance abuse, and other issues. The Lukasa Workshop was held there.
- ② ワークショップで使われたシナリオには、参加者に身近な問題や環境問題を取り上げた。The scenarios used in this workshop involved problems and environments very familiar to the participants.
- ③④ 2つのテーブルで、2チームが同じシナリオに取り組み、お互いのアプローチの違いを比較し、コメントを交わした。There was room for two tables in the Drop-in Center, so two teams worked on the same scenario and were able to compare and comment on each other's approaches.
- ⑤ 昼食をとりながら、メンバーによる紙芝居での、新旧日本の文化や発展に伴う問題点についてプレゼンテーションがあった。Over lunch, project members made a presentation about past and present Japanese culture and the issues that have accompanied development, using simple posters (kami-shibai).

p18

- ① 参加者は自由な表現で環境を制作する。Participants are free to represent features in the environment in any way they please, in this case village huts.
- ② このチームは、彼らが常に熟考している都市環境のネガティブな幾つかの側面に取り組んだ。This team identified several aspects of the urban environment which they consider negative influences.
- ③④ 用意したシンプルな材料は、彼らに想像力溢れる解決や表現を引き出すのに役立った。Imaginative solutions and representations began to emerge immediately as the groups got to work. The simplicity of the materials we were able to provide was a plus in this regard.



活動詳細・ザンビア／Activities in Zambia

8月9日(火)～8月11日(木) セナंगा県庁近郊  
リヤニ村、リニユク村を視察。それぞれの村で村人との会合をもち、近辺の環境利用の様子や、2009年の大洪水時の村人同士の助け合い、政府の援助の様子、エネルギー、開発、家族等の議題について様子を窺った。

Tuesday, August 9 - Thursday, August 11 (Senanga region):  
Visited villages of Liyani and Linyuku. Held meetings with the villagers in each village, and discussed the state of the environment in the region, how mutual assistance was implemented during the great flood of 2009, and the situation concerning government assistance, energy, economic development, and family relations.



p19  
⑧リアニ村でのロジ人たちとのワークショップでは、村人から、地面に地図を描いて、大洪水の時にどのように対処したか説明を受けた。  
During a community meeting in the Lozi village of Lyani, a villager draws a map in the sand to describe how the community has responded to the damaging floods in recent years.  
⑨参加してくれたセナंगाのYWCAのメンバーの夫人は、我々の議論に大きな貢献してくれた。Mrs. Lisulu, a respected member of the Senanga community, had a many insights and perspectives to contribute during the discussion.  
⑩メンバーは用意した紙芝居で日本の農業の紹介をする。  
Project member Rumiko Murao explains Japanese rice farming using the printed kami shibai posters we had prepared.  
⑪雨季が終わった氾濫原ではこの様な仮設の釣り小屋が出来る。  
During the dry season, villagers often occupy temporary fishing camps like this located on the flood plain.  
p20  
⑫リニユク村でのブンダ人たちとのワークショップは、村のランドマークの大きな樹の下で行われた。  
The community of Linyuku gathered under a magnificent tree, one of the landmarks of the village, to discuss resilience and community solidarity.  
⑬村の女性たちは活発に発言する。  
The women of Linyuku contributed quite a lot to the discussion.  
⑭砂地に木片やトウモロコシの種や葉や石を使って地図を描く。  
The conversation resulted in a map of the village made in the sand with sticks, corncobs, and leaves.  
⑮この村は道路や小さな川で区切られた3つの集落で構成されている。  
Linyuku Village, home to members of the Mbunda tribe, is three small hamlets separated by a small river and a road.  
⑯子供は自作のサッカーボールを見せてくれる。  
A village boy shows off the soccer ball he made.







㉑



㉒



㉓



㉔



㉕

8月12日(金) モング近郊

ロジ王国の国王に謁見、首都ルカサへ移動。

8月13日(土)～14日(日) ルサカ

プロジェクトメンバーによる総合討論。

Friday., August 12 (Mongu area):

Audience with Lubosi II, the King of the Lozi Kingdom; return to Lusaka.

Saturday., August 13 - Sunday., August 14 (Lusaka):

General discussion by project members.



㉖



㉗



㉘



㉙

㉖ 伝統的なスタイルの、モングの農家の離れに建てられた小屋。コンクリートで出来ている。

Finely made traditional-style round hut in Limulunga. Though it appears traditional in construction the walls are made of thickly plastered concrete blocks.

㉗ ロジ王国の宮殿を訪問し、国王に謁見。 Lubosi II, the Litunga (king) of the Lozi people, granted project members an audience at the palace at Lealui.

㉘ モングでの最後の日の、メンバー写真。 The team on the last day in Mongu.

㉙ ザンベジ川の日没。 Sunset on the Zambezi River.



東京 2011年11月20日(日)

(参加プロジェクトメンバー：アズビー・ブラウン、竹下都、船田クラーセンさやか、米川正子、村尾るみこ)

ワークショップ WORKSHOP 「現実へのフィードバック アフリカから3・11後の日本へ」

開催時間：12:00-17:30

会場：3331 Arts Chiyoda 1F コミュニティスペース

アフリカ訪問を終えたプロジェクトメンバーは、アフリカ訪問を通じて学んだことを踏まえ、被災地・日本において、「暴力の空間」をどう平和化するのかについて改めて議論した。そして東京のワークショップの目的を、東日本大震災後、様々な困難に直面する日本や世界の現状に対して何ができるのかについて、ルカサ・ワークショップを活用しつつ、各界のリーダーや東北からのゲスト、アフリカ関係者、そして一般市民らと共に議論し、アクションにつなげていくことと設定した。参加者は、昨年このプロジェクトで訪問した各地のリーダーに加え、日本在住のアフリカ人や東北の市民活動家、NPO 代表、アーティスト、学生、ジャーナリストなど多岐に渡った。

ワークショップでは、本プロジェクト概要やアフリカ訪問の報告の後、ルカサ・ワークショップを行った。ルカサ・ワークショップでは、参加者がグループ六名に分かれ、四グループ作り、各チームとも二手に分かれてシナリオにそった立体模型を作成した。本プロジェクトメンバーは、各チームのファシリテーターを務めた。さらにその後、グループをさらに細かくわけて、グループごととに井戸端会議形式で討議をおこなった。討議のなかでは、東北在住者や東北支援に関わる人びとから、現状報告が行われる一方、アフリカからの知恵を学び日本の現状改善に活かす姿勢の重要性への指摘がなされるなど、日本やアフリカ各地の実情を踏まえた諸問題の「超越」にむけ、率直な話し合いがもたれた。以上を通じ、東日本大震災後の新たな「平和の空間」創造のため、2年間の本プロジェクトの成果を参加者全員が共有し、ルカサ・ワークショップで発揮される創造力の大切さを認識した。そしてその後の討論では、それぞれの次なる活動につなげる機運を互いに高め合うことが可能となった。

本ワークショップ終了後、多くの参加者が、今までの物事に対する見解が変わったと感想を述べた。ルカサ・ワークショップの実施方法など細かな改善策を図ることもでき、本プロジェクトにさらなる進展が得られた。

招聘者：

■2010年度から継続して本事業へ参加

- |         |                     |
|---------|---------------------|
| ・西村浩一   | 毎日新聞社編集委員・大阪        |
| ・サコ・ウスビ | 京都精華大学人文学部准教授       |
| ・木下龍一   | 京町家再生研究会・建築家・京都     |
| ・国本善平   | 元・公益財団法人 広島平和文化センター |
| ・金野幸雄   | 一般社団法人ノオト・篠山        |

■2011年度新規に本事業へ参加

- |               |                        |
|---------------|------------------------|
| ・カンベンガ・マリールイズ | ルワンダの教育を考える会・福島        |
| ・ティモシー・アバウ    | アジア学院・那須               |
| ・トシャ・マギー      | NPO テラ・ルネッサンス・京都       |
| ・末永早夏         | 地域活性プロジェクト MUSUBU・いわき市 |
| ・高田彩          | 「わわプロジェクト」宮城エリアリーダー    |



東京でのワークショップは、旧公立の中学校を修復した「3331 Arts Chiyoda」で開催された。

The Tokyo Lukasa Workshop was held at 3331 Arts Chiyoda, a former middle school which has been converted into a space for arts and community.

TOKYO, November 20, 2011

(participating members: Azby Brown, Miyako Takeshita, Sayaka Funada-Cassen, Masako Yonekawa, Rumiko Murao)

“Feedback to Reality : from Africa to post 3.11 Japan”

11/20 (Sun), 2011, 12:00 -17:30

Location: 3331 Arts Chiyoda 1F Community Space

PURPOSE:

On Sunday, November 20, 2011, a workshop was held at the Arts Chiyoda 3331 space in Tokyo. During our activities in Africa the previous summer we sought the advice and opinions of African people of many walks of life about how to help Japanese communities survive the unprecedented catastrophe of 3/11, and gained insight into how communities such as these have been able to maintain their resilience. We intended this workshop to focus on creative processes for building community solidarity and transcending states of conflict that may be of use in Tohoku and Fukushima in the challenging years ahead.

This workshop provided the opportunity to bring together our project team, participants from 2010 in Japan, Africans living in Japan, and representatives of NPOs and other groups who are active organizing community support and rebuilding in Tohoku and Fukushima. Seeing that combining people from these different backgrounds into teams for the workshop would encourage new insights to emerge, we actively sought their participation and enabled them to attend. The invitees also acted as commentators. In addition to the invitees, approximately 20 other people, including media, bankers, writers, and students, participated.

During the course of the workshop, a progress report of the project, including an account of our activities in Africa, was given, followed by a Lukasa Workshop. For this, participants were divided into four groups of six, each at a table, and each table was in turn divided into two teams. With project members acting as facilitators, each table worked through its assigned scenario, making large models. Following this, participants were divided into smaller discussion groups, to hear directly from Tohoku residents and people involved in support activities for Tohoku about the realities they have confronted, as well as words of experience from the African participants that might help people in Japan find direction amid the current crisis and "transcend" the conflicts and challenges. Through this, project members were able to effectively share their findings and observations of the past two years, and to drive home the importance of freeing and stimulating imaginations by means of Lukasa Workshops. Participants left expressing strong desires to maintain contact and join forces wherever possible in their future activities. Many also said that their attitudes towards the problems they face had been changed by the experience. Project members themselves felt that many important and useful lessons had been learned that will prove useful in improving the Lukasa Workshop method, and discovered several new avenues for developing it.

Invited participants from 2010:

- |                      |  |
|----------------------|--|
| --Nishimura Koichi:  | Mainichi Newspaper, Osaka Bureau.                              |
| --Sacko Oussouby:    | Associate Professor, Kyoto Seika University.                   |
| --Kinoshita Ryuichi: | Executive Director, Kyomachiya Council, Kyoto.                 |
| --Kunimoto Zenpei:   | Former Executive Director, Hiroshima Peace Culture Foundation. |
| --Kinno Yukio:       | Executive Director, NPO "Note," Sasayama.                      |

Invited participants 2011 (Africans):

- |                                 |  |
|---------------------------------|--|
| --Marie Louise Ntwali Kambenga: | President, NPO Think about Education in Rwanda, Fukushima. |
| --Timothy Appau:                | Asian Rural Institute, Nasu.                               |
| --Tosha Maggy:                  | NPO Terra Renaissance, Kyoto.                              |

Invited participants 2011 (Organizers):

- |                   |  |
|-------------------|--|
| --Sayaka Suenaga: | Community Activation Project "MUSUBU" Iwaki. |
| --Aya Takada:     | Project Leader, "WA WA" Miyagi Area.         |





2011 年 11 月 20 日（日）東京でのワークショップは、アフリカ音楽の演奏から始まり、中心となったルカサ・ワークショップに加えて、報告や討議など多くの活動が行われた。参加者 24 名は、東北を含む各地から、多様な背景の人々で構成されていたが、各グループ共に、直ぐに自由なコミュニケーションと協力体制が作られた。我々は、この創造的な手による言語は普遍的なものとの確信を得た。

Views of the workshop in Tokyo on Nov. 20, 2011. This workshop included many activities – music, warm ups, opportunities for discussion – in addition to the Lukasa Workshop session itself. Every team was composed of people from very different backgrounds, but participants quickly established strong cooperation and open, sincere communication. The results confirmed our belief that the language of the creative hand is universal.



東京でのワークショップのシナリオと参加者の感想

LUKASA WORKSHOP IN TOKYO

シナリオは次の二種類を用意した。

We developed two scenarios for this workshop. Two tables worked on each scenario, with two teams at each table.

シナリオ1：「環境破壊とODA」

ザンビア・モングにて使用したシナリオをベースとした。首都の木炭事業が拡大し、地方では環境破壊が起きる。地方の人々及び市民団体と、首都住民及び中央政府はどのようにこの問題に取り組むべきか。議論した具体策を立体模型の空間に反映させて提示する。

Scenario 1:  
"ENVIRONMENTAL DAMAGE and ODA issue"

This was based on the scenario used in Mongu, Zambia. Forests have been cut to make charcoal, causing environmental damage which affects everyone but especially villagers who do not benefit from the activity. In addition, this version of the scenario emphasized the role of ODA funds and the consequences of unequal distribution of these funds.

シナリオ2：「一般市民とエリート間の和解」

植民地時代に、市民に過酷で不平等な政策を実施していた一部のエリート層と、一般市民との深い対立を、植民地支配から独立した後どのように和解させるか。議論した具体策を立体模型の空間に反映させて提示する。

Scenario 2:  
"RECONCILIATION between common people and elite group"

This scenario is set in a country recently freed from colonialism. A small elite group which collaborated with the colonizers is now the object of hatred from the newly liberated common people. The elite had monopolized the best land, businesses, resources, and trade, and those who suffered are now seeking justice. Will it be possible to reconcile the two groups?



感想（参加者アンケートから）

1. 手を動かしながら紛争を平和化する手法が、今までになく新鮮で、常識的な思考の枠を超えて自由な発想が出来た。
2. お互いに歩み寄るワークショップは初めての経験で良かった。
3. 精神・言葉・手などのアクションを使って行うグループでの協働の大切さを感じた。
4. 紛争は対立する双方の関係を知るのに役立ち、それが紛争超越の第一歩なのだと云う事を学んだ。
5. 被災者の方とのお話の機会が持てた。
6. 私達が身近なことから変わって、隣人へと伝える大切さを学んだ。
7. 手を動かすことで再発見したり、他人と意見をシェアすることで、思わぬ発見があった。
8. 対立する双方の立場と問題の全体像が見え、よりリアリティを感じると同時にイメージが膨らんだ。
9. もっと具体的な事例を深く掘り下げられると良かった。
10. 初経験のこのワークショップが楽しく時間が短く感じられた。
11. 全体的に時間が短すぎた。もっとアフリカ訪問の際の話も聞きたかった。
12. 最初は自分がどのように関わっていくか戸惑ったが、チームでの作業と目前で具現化される地図に、後半はどんどんアイディアが浮かぶようになった。
13. 今までの会議形式では無く、場を共有し、体を動かす事で自由な方向を見いだせた。
14. 自身の問題で行き詰まった時に、この様な手法を利用したい。
15. リンゴを使つてのトランセンドの話が新鮮で良かった。
16. 自分の関わっているグループに紹介したい。
17. ユニークな手法、ルカサ・ワークショップを伝えたい。

SURVEY COMMENTS FROM THE PARTICIPANTS:

1. This method of using the hands to transform conflict into peace is brand new, and fresh. It moves beyond the common framework and allows ideas to emerge very freely.
2. This was my first time to participate in a workshop in which people with opposing ideas are able to move closer. I'm glad I was able to experience it.
3. I realized the importance of group collaboration that uses the heart, words, and hands.
4. I learned that seeing the viewpoints of both sides is the most important thing in order to overcome disputes.
5. I had the opportunity to speak with people who have suffered from tremendous violence.
6. We learned the importance of shifting from our familiar sphere and conveying our thoughts to those around us.
7. Rediscovering what it means to use our hands, and sharing opinions with strangers, allowed unexpected discoveries.
8. I was able to see the big picture of people on opposite sides of a problem, and this gave me a greater sense of reality and stimulated my imagination.
9. It would have been good to be involved with more concrete examples.
10. It was my first time to participate in this kind of workshop, and it was so much fun that time went by quickly.
11. Overall, the time was too short. I wanted to hear more about the activities in Africa.
12. At first I wasn't sure what I should do, but as we began to work together on the map in teams, by the second half of the session I had more and more ideas.
13. I was able to find a new, freer direction by moving my body and sharing a space with others, that was very unlike the meetings I've experienced until now,
14. I want to use methods like these when I get stuck on problems of my own.
15. The discussion of "Transcend" that used the apple was very fresh.
16. I want to introduce these methods to the groups I participate in.
17. I want to tell others about this unique method, the Lukasa Workshop.



本プロジェクトの1年目の終わりに、東日本大震災が発生した。本プロジェクトは、同震災後も混乱した状況を抱える日本を「暴力の空間」として捉え、この状態をどう平和化できるかを課題として掲げることにした。まさに、本プロジェクトの実践面での真価が問われることとなった。したがって、当初予定していた計画から少し変更を行った。また、申請時に予定をしていたコンゴ民主共和国・ルバ人の居住地訪問は、同地の治安面での課題が克服されなかったことから、訪問地をモザンビークとザンビアの二か国に絞ることとなった。

2011年度の事業からは、以下のような成果が得られた。

1. 訪問した各地に於いて、アフリカと日本の知的交流が豊かに為された。
2. 現地視察や講演会、紙芝居、ワークショップを通じて、アフリカ一般社会への日本理解が広がった。
3. ルカサ・ワークショップを通じて、アフリカ、日本、そしてひいては世界各地の「暴力の空間」と「平和の空間」についての、具体的な情報の収集と問題共有が為された。また、ルカサ・ワークショップが、「暴力の空間」を平和化する理論確立および実践的手段として有効となる可能性を参加者と共有した。
4. アフリカからの学びを、日本に於いて共有し還元する事が出来た。
5. 従来の国際交流や会議を超えて、新たな会議様式や、独創的なワークショップ・ツール「ルカサ・ワークショップ」を実施し、より発展させて大きな成功を収めた。
6. 前年度に続き、今年度もルカサ・ワークショップ開発を継続したことで、主に次の三点の進展がみられた。
  - (ア) アフリカ、日本双方において、参加者は、「暴力の空間」の構造を基本的に理解しており、イメージを口頭で説明し議論することが可能であることを確認した。そこでルカサ・ワークショップでは、「平和の空間」創造に寄与する理論的枠組みの理解と、立体模型作成によって「暴力の空間」を視覚化する段階に時間をとることを工夫した。
  - (イ) 参加者は、「暴力の空間」について、個人や地域社会の社会経済的基盤が損なわれることによって、様々な問題解決能力が相対的に低下する空間であると認識していた。ルカサ・ワークショップでの議論を通じて、同ワークショップ手段が個人や社会が抱える諸課題に取り組むべく、新たな社会関係や具体的な問題解決策を創出することを手助けし、個人や社会の問題解決能力を補強するよう作用する可能性が見出された。
  - (ウ) アフリカや日本の各地では、政府や伝統的権威といった権力者が、地域住民の声を理解したり考慮したりすることなく決断を下すという意見が多く聞かれた。ルカサ・ワークショップを通じては、ルカサ・ワークショップそのものが地域住民の声を掬い上げ、直接リーダーに伝達するツールとして有効となることが示唆された。

### 今後の発展の展望

「ルカサ・ワークショップ」のマニュアル作成。

2010年～2012年にかけて開発・実施した結果、この独創的な「暴力を平和に変える」ワークショップのツールの使用希望が各所・各団体から出ている。「ルカサ・ワークショップ」を広く普及させるため、現在トレーニング・マニュアルの編集を進めている。これには1年を要する見込みであるが、同マニュアルは出版し、広く社会と共有したいと考える。

### 「ルカサ・ワークショップ」の実施場所。

今後、このワークショップの有益なる実施に向け、場所（日本、アフリカ、他）の検討をする。（出前ワークショップ等も考慮する。）

### 「かまど」プロジェクトの実施

今回の訪問地・ザンビア西部州のセナンガに於いて、我々が発表した日本のかまどに、村人が非常に興味を持った。現地では屋外で調理をしているが、このエネルギー効率が良く、作るのも簡単なかまど利用を普及させて行く計画を、実現方向に現在調査中である。

### 「茶室・篠山」計画

2010年度の本プロジェクトで日本に招聘され、ワークショップのために篠山を訪問したモザンビークの建築家ジョゼ・フォルジャズがデザインする茶室を「平和空間」として設置すべく、実現に尽力する。

### 「専用ブログ」

今後のフォローアップとして専用ブログを随時更新し、情報を広く提供し共有する。

Between the completion of the 2010 stage of this project and the beginning of the 2011 stage, the Great Eastern Japan Earthquake, tsunami, and nuclear disaster at Fukushima occurred. Although these catastrophes were unforeseen when we initially planned our activities for 2011, the project members recognized that both Japan and the world had been presented with the immediately necessity to transform this "space of violence" into a "space of peace." Because of the catastrophes and the new necessities that emerged, the project plan was modified. In addition, because of continuing insecurity in the Democratic Republic of the Congo and the difficulty of obtaining current information about conditions in our target area there, we determined that our plan to do site visits to Luba communities would be impractical. Consequently, after judging that we would be able to complete our objectives of developing the Lukasa Workshop methods onsite sufficiently, we narrowed our focus to Zambia and Mozambique.

### In the project of 2011, these results were obtained:

1. A strong intellectual and cultural exchange was established between Japan and the locations visited in Africa.
2. Through site visits and lectures, "kami-shibai" presentations, and workshops held by project members, understanding of Japanese society was increased within African society.
3. By means of the use of Lukasa Workshops, a concrete and practical mutual exchange of information and perceptions concerning "spaces of violence" and "spaces of peace" was established. In addition, the possibilities of using Lukasa Workshops to help transform spaces of violence into spaces of peace, and the theory and practice required to do this, were discussed and developed with African participants.
4. Many lessons were learned and ideas found which could be returned to Japan from Africa.
5. The Lukasa Workshop method was clearly shown to be a more creative technique which can easily move beyond conventional international exchanges and meetings, and was very successful in this regard.
6. Continuing from 2010, several areas of progress were demonstrated concerning the Lukasa Workshop in particular:
  - A. It became clear that participants are able to understand the essential structure of the problem of "spaces of violence," and that it is possible to visualize and discuss it. In addition, it was shown that it is possible to evaluate the degree to which participants became more receptive to the possibility of transforming spaces of violence into spaces of peace, by means of introducing a theoretical framework and then making three-dimensional models.
  - B. Participants recognized that spaces of violence are closely related to both individual and society-wide economic conditions, and how this makes it more difficult to solve such problems. It was demonstrated that the Lukasa Workshop enables participants to improve their ability to find solutions to real problems by working on tasks which replicate these individual and social conditions.
  - C. People in communities in both Africa and Japan feel that decisions that affect them are often made by leaders who are either unaware of how the community feels or ignores their voices. The Lukasa Workshops can help them find their voices, and can become a tool for communicating their messages directly to decision makers.

### NEXT STEPS:

#### Lukasa Workshop Manual:

The team has begun compiling a training manual for "Lukasa" workshops, to introduce the ideas and methods to people who are interested and who might be able to make use of them. The techniques will continue to be refined and expanded as work on this manual progresses. The process will take approximately one year.

#### Implementation of Lukasa Workshops:

Upon completion of the manual, we feel it will be important to identify sites in Africa and Japan where the workshop can be beneficially implemented.

### INITIATIVES:

#### Kamado for Africa:

Villagers in the Senanga area of Western Zambia expressed great interest in the traditional kamado clay stove, which we showed pictures of and described during our talks. These stoves are extremely durable and fuel efficient, and inexpensive to make. We are investigating the feasibility of modifying the design to suit needs and conditions of these communities, and the possibility of teaching methods for constructing and using them.

#### Teahouse for peace:

Beginning with the site visit to Sayama in 2010, architect Jose Forjaz of Mozambique has been designing a teahouse as a space of peace to be built in Sasayama.

#### Project Blog:

The project blog at <<http://spacepeace.exblog.jp>> is being continually updated and revised to present project-related activities in Japan and elsewhere.



ポスター兼チラシ：1,000部作成、大学・美術館・ギャラリー・関係団体に配布

**Poster/flyer:** 1000 copies published and distributed to universities, museums, galleries, NPOs and related organizations.

**AFRICA X JAPAN X WORLD**

Space for Transforming Violence into Peace

# 暴力を平和に変える空間II

WORKSHOP

Feedback to Reality: from Africa to Post-3.11 Japan

現実へのフィードバック: アフリカから3.11後の日本へ

2011.11.20 (日) 12:00-17:30 (参加費 500円)

3331 Arts Chiyoda

<http://spacepeace.exblog.jp/>

2010年より開始された本プロジェクトは、「暴力の空間」を「平和の空間」に変えるためには何ができるかを、世界・アフリカ・日本からの多様な参加者同士で話し合い、ワークショップを通じて実践を繰り返してきました。そうしながら、本年の第10回大会では「平和の空間」を創出する視覚的言語について、自然災害の観点から考える大きなきっかけとなりました。プロジェクトメンバーは、震災後、世界的に広がる平和と復興への取り組みに共感し、アフリカの紛争のみならず、世界の自然災害、特に日本を襲った東日本大震災に焦点を当てます。同時代を生きるアフリカと日本の人びとと、何ができるかと全員で議論を深め、次のステップへ進むべく、本ワークショップを開催しました。

アフリカ  
X  
日本  
X  
世界

主催：金沢工業大学 未来デザイン研究所  
 企画：アフリカ×日本×世界 暴力を平和に変える空間 II 実行委員会  
 助成：独立行政法人国際交流基金

問い合わせ・予約先：金沢工業大学 未来デザイン研究所  
 〒152-0001 東京都目黒区三軒が通1-15-15 tel: 03-5410-4179 fax: 03-5410-5077  
 email: [myokan@spacepeace.kanazawa-u.ac.jp](mailto:myokan@spacepeace.kanazawa-u.ac.jp)

会場：3331 Arts Chiyoda, 1F Community Space  
 〒114-0001 東京都千代田区千代田6-7-11-14  
<http://www.3331.jp>

最寄り駅：有明駅 徒歩約4分  
 最寄りバス：有明駅 徒歩約4分  
 最寄りバス：有明駅 徒歩約4分  
 最寄りバス：有明駅 徒歩約4分

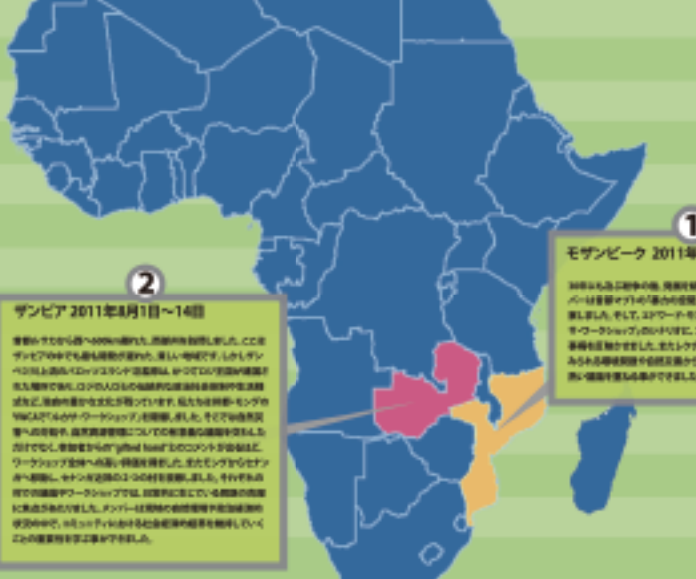
## プロジェクトの背景

2010年に引き続き、本年再び国際交流基金の協力を得て「アフリカ×日本×世界」をテーマに「暴力を平和に変える空間」を創出しました。まず日本のメンバーは、昨年の国際交流基金の「アフリカ×日本×世界」をテーマにしたワークショップを開催しました。また、アフリカのメンバーは、都市や農村でのワークショップを開催しました。文化や言語や価値観の違い、そして地理的な隔たりを乗り越え、共に学び、共に成長し、交流を共有することを通して、自然災害や資源問題をめぐる対話に、コミュニティの協力がいかに大切であるかを認識しました。また、自然災害に被災し、避難を余儀なくされる人々とともに生活し、共に暮らすことについて話し合ってきました。

一方で、アフリカ諸国の多くは日本を離れたメンバーは、震災後の日本の現状、アフリカおよび世界の現状、その社会や資源をめぐる課題と大きく違っていることを痛感しました。そして昨年同様、今回のアフリカ諸国を通じて、日本とアフリカの間に、暴力を平和に変える空間を創出することを目指して、ワークショップを開催しました。

# AFRICA X JAPAN X WORLD

## Space for Transforming Violence into Peace



**①**

**モザンビーク 2011年7月25日～31日**

2010年10月にモザンビークで開催されたワークショップ。メンバーは、アフリカの現状、日本と世界の現状、その社会や資源をめぐる課題と大きく違っていることを痛感しました。そして昨年同様、今回のアフリカ諸国を通じて、日本とアフリカの間に、暴力を平和に変える空間を創出することを目指して、ワークショップを開催しました。

**②**

**ザンビア 2011年8月1日～14日**

2010年10月にザンビアで開催されたワークショップ。メンバーは、アフリカの現状、日本と世界の現状、その社会や資源をめぐる課題と大きく違っていることを痛感しました。そして昨年同様、今回のアフリカ諸国を通じて、日本とアフリカの間に、暴力を平和に変える空間を創出することを目指して、ワークショップを開催しました。

**③**

**東京 2011年11月20日**

**Feedback to Reality: from Africa to Post-3.11 Japan**

**現実へのフィードバック：アフリカから3・11後の日本へ**

**ワークショップ WORKSHOP 2011.11.20 (日) 12:00-17:30**


(参加費500円 定員30名 要予約)

3331 Arts Chiyoda 1F, Community Space

## プロジェクトの進捗

2010年に引き続き、本年再び国際交流基金の協力を得て「アフリカ×日本×世界」をテーマに「暴力を平和に変える空間」を創出しました。まず日本のメンバーは、昨年の国際交流基金の「アフリカ×日本×世界」をテーマにしたワークショップを開催しました。また、アフリカのメンバーは、都市や農村でのワークショップを開催しました。文化や言語や価値観の違い、そして地理的な隔たりを乗り越え、共に学び、共に成長し、交流を共有することを通して、自然災害や資源問題をめぐる対話に、コミュニティの協力がいかに大切であるかを認識しました。また、自然災害に被災し、避難を余儀なくされる人々とともに生活し、共に暮らすことについて話し合ってきました。

一方で、アフリカ諸国の多くは日本を離れたメンバーは、震災後の日本の現状、アフリカおよび世界の現状、その社会や資源をめぐる課題と大きく違っていることを痛感しました。そして昨年同様、今回のアフリカ諸国を通じて、日本とアフリカの間に、暴力を平和に変える空間を創出することを目指して、ワークショップを開催しました。



## プロジェクトの成果

2010年に引き続き、本年再び国際交流基金の協力を得て「アフリカ×日本×世界」をテーマに「暴力を平和に変える空間」を創出しました。まず日本のメンバーは、昨年の国際交流基金の「アフリカ×日本×世界」をテーマにしたワークショップを開催しました。また、アフリカのメンバーは、都市や農村でのワークショップを開催しました。文化や言語や価値観の違い、そして地理的な隔たりを乗り越え、共に学び、共に成長し、交流を共有することを通して、自然災害や資源問題をめぐる対話に、コミュニティの協力がいかに大切であるかを認識しました。また、自然災害に被災し、避難を余儀なくされる人々とともに生活し、共に暮らすことについて話し合ってきました。

一方で、アフリカ諸国の多くは日本を離れたメンバーは、震災後の日本の現状、アフリカおよび世界の現状、その社会や資源をめぐる課題と大きく違っていることを痛感しました。そして昨年同様、今回のアフリカ諸国を通じて、日本とアフリカの間に、暴力を平和に変える空間を創出することを目指して、ワークショップを開催しました。

## プロジェクトの未来

2010年に引き続き、本年再び国際交流基金の協力を得て「アフリカ×日本×世界」をテーマに「暴力を平和に変える空間」を創出しました。まず日本のメンバーは、昨年の国際交流基金の「アフリカ×日本×世界」をテーマにしたワークショップを開催しました。また、アフリカのメンバーは、都市や農村でのワークショップを開催しました。文化や言語や価値観の違い、そして地理的な隔たりを乗り越え、共に学び、共に成長し、交流を共有することを通して、自然災害や資源問題をめぐる対話に、コミュニティの協力がいかに大切であるかを認識しました。また、自然災害に被災し、避難を余儀なくされる人々とともに生活し、共に暮らすことについて話し合ってきました。

一方で、アフリカ諸国の多くは日本を離れたメンバーは、震災後の日本の現状、アフリカおよび世界の現状、その社会や資源をめぐる課題と大きく違っていることを痛感しました。そして昨年同様、今回のアフリカ諸国を通じて、日本とアフリカの間に、暴力を平和に変える空間を創出することを目指して、ワークショップを開催しました。



インターネット：

- ③本プロジェクト・ブログ：<http://spacepeace.exblog.jp/>
- ⑥金沢工業大学 未来デザイン研究所・ブログ：[http://www.kanazawa-it.ac.jp/fdi/FDI/WORKSHOP\\_NOV.20.2011.html](http://www.kanazawa-it.ac.jp/fdi/FDI/WORKSHOP_NOV.20.2011.html)
- ⑦わわプロジェクト・ブログ：<http://wawa.or.jp/blog/201111.html>
- ⑧House of African Art (HAA!) ブログ：[http://www.houseofafricanart.jp/japan/event/detail\\_145.html](http://www.houseofafricanart.jp/japan/event/detail_145.html)
- ⑨ビルド・ファergus・ブログ：<http://blog.birdoflugas.com/?month=201111>
- ⑩横浜トリエンナーレ2011 関連事業：[http://shinminatomura.com/people/initiative\\_organization/kanazawa\\_institute.html](http://shinminatomura.com/people/initiative_organization/kanazawa_institute.html)

Internet:

- ③Project blog: <http://spacepeace.exblog.jp/>
- ⑥KIT Future Design Institute web page: [http://www.kanazawa-it.ac.jp/fdi/FDI/WORKSHOP\\_NOV.20.2011.html](http://www.kanazawa-it.ac.jp/fdi/FDI/WORKSHOP_NOV.20.2011.html)
- ⑦WaWa project blog: <http://wawa.or.jp/blog/201111.html>
- ⑧House of African Art (HAA!) blog: [http://www.houseofafricanart.jp/japan/eventdetail\\_145.html](http://www.houseofafricanart.jp/japan/eventdetail_145.html)
- ⑨Bird Flugas blog: <http://blog.birdoflugas.com/?month=201111>
- ⑩Yokohama Triennale 2011 Shinminatomura: [http://shinminatomura.com/people/initiative\\_organization/kanazawa\\_institute.html](http://shinminatomura.com/people/initiative_organization/kanazawa_institute.html)



展示：2011年9月4日～11月6日 横浜トリエンナーレ2011 関連事業「新・港村」新港ピアにて  
Exhibitions: Yokohama Triennale 2011 Shinminatomura, Yokohama: Sept 4. - Nov 6., 2011



2011年11月21日～12月20日 3331 Arts Chiyoda わわプロジェクトルーム  
Arts Chiyoda 3331, WaWa Project Room, Tokyo: Nov. 21-Dec. 20, 2011





(2012年3月1日現在)

国際航空運賃	¥1,053,965
国内交通費	¥ 254,200
滞在費	¥ 582,824
謝金	¥ 344,592
車両借上費	¥ 305,157
その他	¥ 562,922

総合計 ¥3,103,660

国際交流基金・知的交流会議助成プログラムの助成金、及び金沢工業大学の助成金にて実施された。

(As of March 1, 2012)

International airfare:	¥ 1,053,965
Domestic transportation:	¥ 254,200
Accommodation:	¥ 582,824
Honoraria and fees:	¥ 344,592
Vehicle rental:	¥ 305,157
Miscellaneous:	¥ 562,922

Total: ¥ 3,103,660

All project activities were carried out with funds received from the Japan Foundation Intellectual Exchange Department and Kanazawa Institute of Technology.



『アフリカ×日本×世界 暴力を平和に変える空間 II』2011 報告書

発行人 アズビー・ブラウン  
編集 竹下都  
デザイン 浅石匡  
発行日 2012年3月  
発行 金沢工業大学 未来デザイン研究所 ©2012  
150-0001 東京都渋谷区神宮前 1-15-13  
tel:03-5410-8379 fax:03-5410-3057  
<http://wwwr.kanazawa-it.ac.jp/fdi>

Final Report -- "AFRICA × JAPAN × WORLD:  
Space for Transforming Violence into Peace II" 2011

Direction, editorial: Azby Brown  
Production, editorial: Miyako Takeshita  
Design: Tasuku Asaishi  
Publication date: March, 2012  
Published by: KIT Future Design Institute © 2012  
1-15-13 Jingumae, Shibuya-ku, Tokyo 150-0001, Japan  
tel: +81 3-5410-8379 fax: +81 3-5410-3057  
<http://wwwr.kanazawa-it.ac.jp/fdi>



